

ぼくはトトくん

原田康法

ひまわり薬局は、ひので商店街のすみにある、小さなお薬屋さんです。

このひまわり薬局の店先に、十円玉を入れると、波のりのように上へ下へとうごく新幹線ののりものがポツンとおいできました。なまえを超とつきゅうの「トトくん」といいます。

トトくんは、日本ではじめて走ったむかしの新幹線のかっこうをしています。このお店のおじいさんとおばあさんが、まだ若かったころ、お店に来てくれる小さな子どもたちのために、知りあいからゆずってもらったおもちゃ。それが、トトくんでした。

でも、何年かまえにおじいさんが亡くなり、おばあさんひとりになってからは、お店も閉まっている日がおおくなって、トトくんにのりたがる子も、ほとんど来なくなってしまいました。

（あゝあ、つまらないなあ。もっと、みんなとあそびたいなあ）

おなじ新幹線でも、近ごろでは、新しいかたちの新幹線がたくさん走っていることを、トトくんは知っています。ひまわり薬局のちかくには、ほんものの新幹線の線路があって、店先からも、走っている新幹線を見ることができるようです。トトくんは、ため息をついて、自分の体をながめました。ハンドルにもイスにもさびがういてしまって、体をうごかさうとすると、ギイギイ歯車が音をたてます。これでは、せっかくの新幹線もだいなしです。

トトくんは、毎日毎日、朝には、学校へいく子どもたちを見おくり、午後には、家にかえ

る子どもたちに「おかえり」をいいます。でも、だれもトトくんの声には気づきません。

ある日、トトくんは、自分のまえを知らんぷりでとおりすぎていく子どもたちを見ているうちに、とうとう、がまんができなくなって、「うえ〜んっ」と声をあげて泣きだしてしまいました。すると、びっくりしたおばあさんが家から出てきて、「おやまあ、この子も、とうとうこわれちゃったかねえ」といいました。泣いているトトくんは、大人からは、お金もいれていないのに、ピイッピイッとけいてきをならしながらうごく、こわれた機械にしか見えないうのです。

つぎの日曜日、近所に住んでいるおばあさんの息子さんが、ひまわり薬局にやってきました。息子さんは、コンセントをさしこんただけで、うごきだしてしまうトトくんを見て、「もう、処分するしかないよ」と肩をすくめて見せました。トトくんは、悲しくて悲しくて、なみだをポロポロこぼしました。

「いやだよお！ぼく、なんにもわるいことしてないよお！」

まだまだ、子どもたちをのせていっぱいはたらけるのに、処分なんて、あんまりです。けれども、なみだのかわりに流れ落ちたオイルを見て、息子さんは、「今度の日曜日、トラックで引きとりにくるよ」とおばあさんにいいました。コンセントをはずされたトトくんは、うごくこともできずに、ヒックヒックと泣きながら、ただ、処分の日をまつしかありませんでした。

それから一晩たった、月曜日の朝のことです。ひとりの小さな男の子が、ふたつのこぶし

にぎゅっと力を入れて、道のはんたいがわからトトくんを見ていました。

(だれだろう？まだ、お昼まえなのに、学校はどうしたのかな？)

トトくんは、ふしぎに思いました。男の子は、目をまんまるにさせて、トトくんにきょうみしんしんのようにすです。とうとう、あたりを見まわしてから、はねるように、こちらに近づいてきました。そして、トトくんのいすにポスンツとどびのると、ハンドルをにぎって、

「ガタガタンツ、ガタガタンツ」とはずむように口ずさみはじめました。

「しゅっぱつしんこうー！」

男の子が元気にさげんだ、そのときです。コンセントをぬかれているはずのトトくんが、とつぜん、うごきだしました。びっくりして男の子がふりかえると、おばあさんが、トトくんたちのうしろでニコニコしています。コンセントをさしこんでくれたのは、おばあさんだったのです。

「いらっしやい」

おばあさんは、どうしていいかまっまっている男の子のあたまをなでて、「ひさしぶりに、トトくんの笑い声が聞こえるわねえ」といいました。こんどは、トトくんもびっくりしました。おばあさんには、トトくんの声が聞こえるのでしょうか？

男の子のなまえは、健二くんといいました。健二くんは、お父さんのお仕事のついで、この町にひっこしてきたばかりの一年生でした。

健二くんには、まだ、友だちがいません。まえに住んでいた町で、たくさんの友だちにか

こまれていた健二くんは、この町では、なんだかとてもはずかしくて、友だちをつくれな
いでいました。健二くんの言葉には、ほんのちよっぴりですが、まえに住んでいた地方の「な
まり」があったのです。それで、学校に行くのがつらくて、とうとう、今日はお熱が出たと
ウンをついて、休んでしまったのです。

「そう？それは、さみしいわねえ。お友だちがないのは、とてもさみしいでしょう。この
トトくんもおなじなの」

おばあさんは、学校を休んでしまった健二くんをしかったりしませんでした。そのかわり
に、こんなふうにいいました。

「そうだ。あとで健二くんのクラスの子どもたちがかえってくる時間にあわせて、もう一度
トトくんのにりにいらっしやい。おばあちゃんが、すぐにお友だちをつくってあげるから」

「ほんとうに？でも、どうするの？」

「だいじょうぶ。おばあちゃんに、いい考えがあるわ」

おばあさんは、そういつて、にっこりと笑いました。健二くんは、首をかしげながら、そ
れでも、大よろこびです。

トトくんは、おばあさんは、ほんとうにやさしいんだなあと思いました。そういえば、こ
のお店にトトくんをつれてきてくれたのも、おばあさんなのでした。

むかし、まだ、トトくんが生まれたばかりのころのことです。トトくんは、デパートの屋
上にあるゆうえんちで、ほかのおもちやたちといっしょにはたらいっていました。そのころは、

新幹線が大人気で、トトくんは、子どもたちのあこがれのまどでした。

けれども、近くにほんもの大きなゆうえんちができて、トトくんのいたデパートのゆうえんちには、お客さんがなくなってしまいました。そして、何年かがすぎて、とうとう、デパートそのものが、とりこわされることになったのです。

トトくんも処分されることになりました。その時、トトくんをひきとってくれたのが、ひまわり薬局のおばあさんでした。知りあいのデパートの店員さんから、トトくんのことを聞いたおばあさんは、このままこわされてしまうのはかわいそうだと思って、自分たちの店先にトトくんをおいてあげようと思ったのです。おじいさんも、大さんせいでした。

こうして、トトくんは、ひまわり薬局にやってきました。デパートにくらべたら、お店にきてくれるお客さんは、ずっと少なかったけれど、トトくんは、感謝の気もちでいっぱいでした。

「ほく、おじいさんとおばあさんのために、いっぱいはたらくんだけ」
そう心に決めて、今日までがんばってきたトトくんなのです。

健二くんは、一度、家にかえってお昼ごはんを食べてから、ふたたびひまわり薬局にやってきました。ちょうど、学校から一年生がかえってくる時間です。

「よおし、じゃあ、トトくんにがんばってもらおうかねえ」

おばあさんがコンセントをさしこむと、トトくんは、健二くんをのせてうごきました。

やがて、健二くんのクラスの子が、ひとり、ふたりと学校からかえってきました。みんなは、

トトくんについている健二くんを見ると、うらやましそうに立ちどまりました。

「わあ、いいなあ」

「健二くん、楽しそう」

男の子も女の子も、目をキラキラさせて、トトくと健二くんにくぎづけです。けれども、ひとりの男の子がいました。

「だけど、健二くん、かぜで学校を休んだんだよね？こんなところであそんでるなんて、ずるいよ」

すると、べつの女の子もいました。

「そうだよ、健二くんいけないよ」

「先生にいつてやろう」

たちまち、ひまわり薬局の店先は、大さわぎです。すると、すかさず、おばあさんがいいました。

「ちがうのよ。健二くんは、かぜのお薬を買いにきたのよ。でも、お薬をのんだら元気になって、それで、トトくとあそんでいたのよ」

さすが、おばあさんです。みんなにせめられて、こまっていた健二くんにおばあさんは、チラッとウィンクしてみせました。

「なあんだ、そうだったのか」

「健二くん、ごめんね」

子どもたちは、そう言って、健二くんにあやまりました。

「ううん、ちがうよ。ぼくは・・・」

健二くんが、ほんとうのことをいおうとすると、こんどは、トトくんがパイイツとけいてきをならしました。

「いいんだよ、健二くんは、なにもいわなくて」

トトくんは、そう言ってあげたつもりでした。だれだって、つらいことや悲しいことがあるのです。ときには、そのつらいことや悲しいことから、逃げてしまいたくなることだってあるでしょう。でも、たいせつなのは、そんなときには、みんなでその子をまもってあげることなんだとトトくんは思ったのです。

トトくんは、力いっぱい健二くんをのせてうごきました。すると、まわりで見ていた子どもたちが、「ぼくものりたいな」「わたしも!」といました。

「みんな、じゅんばんでのろうよ」

健二くんのことばに、みんな、大さんせいでした。

ひとりひとり、子どもたちをのせながら、トトくんは、とてもしあわせな気持ちでした。でも、こうしていられるのも、あとほんのわずかです。トトくんは、キャツキャツとはしゃぐ子どもたちの笑顔をながめながら、みんなに、「さよなら」をいいました。トトくんは、もう自分がこわれはじめていることに、ほんとうは気がついていたのでした。

それから何日かがすぎて、とうとう、次の日曜日がやってきました。おばあさんの息子さん

んが約束していたとおり、朝から小さなトラックが、ひまわり薬局のまえにとまりました。トトくんは、ああ、このトラックにのせられて、ぼくはつれていかれちゃうんだと思いました。

けれども、トラックからおりてきたのは、おばあさんの息子さんではありませんでした。

健二くんと健二くんのお父さんです。

「このまえは、子どもがお世話になりました」

メガネをかけた、やさしそうな健二くんのお父さんが、むかえに出たおばあさんとあいさつをしました。健二くんも「こんにちは」をいいました。

健二くんのお父さんの話では、健二くんは、学校でほんとうのことを話したのだそうです。言葉に「なまり」があつて、みんなに話しかけにくかったこと。それで、学校に行くのがつらくなって、つい休んでしまったこと。けれども、なにもかも打ち明けたおかげで、健二くんは、クラスのみんなとほんとうの友だちになれたのでした。

「そう、それはえらかったわねえ！」

おばあさんは、健二くんのあたまやほつぺたをなでて、いっぱいほめてあげました。

「うん、おばあちゃん、ありがとう！トトくんも、ありがとう！」

健二くんも、まんまるの笑顔をかべて、とてもうれしそうです。

「じつは、今日は、おれいにトトくんの修理をしたいと思ってきました」

健二くんのお父さんが、トラックの荷台から工具箱をおろしながらいいました。健二くん

のお父さんは、自動車の修理やさんだったのです。

トトくんは、びっくりしました。まさか、さびだらけになったおもちゃをなおしてくれる人があらわれるなんて、思いもしなかったからです。けれども、健二くんのお父さんは、いっしょうけんめいでした。自動車とは、ちがうところもいっぱいあるトトくんでしたが、健二くんのお父さんは、ていねいにひとつひとつの部品を洗ったり、こうかんしてくれたりしました。

まもなくして、健二くんのお母さん、それに、クラスのみんなが、ひまわり薬局にやってきました。

「わたしたち、トトくんのために、おり紙でお花をつくってあげるね」

女の子たちが、いいました。

「ぼくたちは、トトくんをきれいにぬってあげるんだ」

男の子たちは、ペンキをもってきていました。

こうして、みんなが力をあわせて、トトくんをピカピカにしていきました。お昼は、みんなでおむすびを食べ、午後になると、いよいよ完成です。

「できたあ！」

修理がおわったトトくんをまえに、健二くんが手をたたいてとびはねると、みんなから、大きな歓声があきおこりました。

新しいトトくんは、ほんとうにピカピカの新品のようになっていました。おばあさんのお

願いで、健二くんのお父さんは、十円玉のかわりにスイッチを入れるだけで、だれでもトトくんとあそぶことができるようにしてくれました。

「しゅっぱつしんこうー！」

いちばんはじめにトトくんにのったのは、健二くんでした。今は、すっかり友だちとなつたみんなが、「健二くんが、いちばんにのりなよ」といつてくれたのです。

うごきだしたトトくんの上で、健二くんは、楽しそうに笑いました。健二くんだけでなく、おばあさんも、健二くんのお父さん、お母さん、それに友だちみんなが、ニコニコしています。

トトくんは、「ぼく、このお店に来てよかったな。今日は、なんて、楽しいんだろう！」と思いました。

「ありがとう！みんな、みんな、ありがとう！」

トトくんの笑い声が、みんなの笑い声にまじりました。どこまでもすんだ深く青い空には、まっしろな雲がうかんでいます。お日さまが、「みんな、ずっとずっと、しあわせにね！」そういつてくれているかのように、あかるく、あかるくかがやいていました。